

吉蔵撰『金光明経疏』の真偽問題

奥野光賢

(一) はじめに

本年(二〇〇三年)九月、林鳴宇氏によって『宋代天台教学の研究』『金光明経』の研究史を中心として¹⁾が刊行された。総頁数八百五十頁に及び大著である。

同書の「跋」によれば、林氏は来日してまだ十年あまりのことであり、かかる林氏が今回このような大著をまとめられるために払われたご努力は並大抵のものではなかったに相違ない。まずは林氏の払われた並々ならぬご努力に対し、心からの敬意を表するものである。

さて、同書第二篇第二章第三節において、林氏は「吉蔵の『金光明経疏』²⁾について論じ、従来吉蔵(五四九 六三三)の撰述とされてきた『金光明経疏』(大正蔵三九、No. 一七八七)は吉蔵の真撰ではあり得ず、偽撰であることを主張されている。また、氏は同書の刊行に先立つて行なわれた今年度の日本宗教学会学術大会においても、「吉蔵撰『金光明経疏』の真偽について」と題して発表され、同様の主張をなされている³⁾。

そもそも、吉蔵の撰述とされる著作に対する文献学的研究(著者性に関する研究)は、一部の著作を除いてあまり進んでいないというのが実情であり、こつした研究状況の中、今回林氏が果敢に『金光明経疏』の真偽問題を取り上げられたことは大いに意義のあることであった。ただ、氏の所論を拝読してみると、私には納得することができない点があること

も事実なので、以下に私見を述べて林氏をはじめ諸先学のご教示を仰げればと願う次第である。

本来ならば、日本宗教学会の学会誌に掲載されるであろう林氏の論文を待つて本稿を草すべきであったかもしれないが、あえてそうしなかったのは、氏の所論は基本的にはすでに公刊されている前記ご著書と大きく変わるものではないと私が判断したこと、さらに私の意見を先に示すことによって、学会誌では林氏が私見に対する批判を提示して下さることを期待したからに他ならない。

（二）林氏の所説

では、最初にこの問題に対する林氏の所論をみておこう。

林氏はまず、花山信勝氏⁽⁵⁾、平井俊榮氏⁽⁶⁾の見解を取り上げ、『金光明経疏』がこれまで吉蔵の晩年の著作とされてきたことを紹介している。しかし、花山、平井両氏の見解は林氏も指摘しているように、具体的論拠が示されて述べられているものではない。これは両氏の提示された見解が辞典中の記述であったり、解説中のものであったため、多分に紙幅の制限があったためであろうと推測される。それはともかく、林氏は上記のような花山、平井両氏の『金光明経疏』に対する見解を踏まえた上で、次のように述べている。

従来、『金光明経疏』は吉蔵の晩年の作と推測されてきたが、その根拠は明確に述べられていなかった。確かに、『金光明経疏』には作成年代や作成場所が記されておらず、^(a)文中でも他の著述の引用については、明言していないため、作成年代を判断するのは極めて難しい。⁽¹⁾二四六頁、引用文中の番号、記号^(a)は奥野による補い、傍線部も奥野による。

さらに続けて氏は次のように言われる。長文に亘るが、正確を期すため関連する全文を引いておこう。

現在、『金光明經疏』の文頭に記されているように、「沙門吉蔵」の作であるとされているが、その内容を細かく分析すると、さまざまな疑問点が浮かび上がってくる。

吉蔵は少年時代に、真諦と出会った。真諦から「吉蔵」という名を授かったと言われている。^①吉蔵が撰述した『金剛般若疏』、『法華義疏』、『法華玄論』、『勝鬘宝窟』、『維摩經義疏』、『浄名玄論』、『百論疏』、『中觀論疏』が真諦の見解を引用する場合はほとんど、明確に「真諦三蔵」と記す。この『金光明經疏』の内容も、真諦の『金光明疏』に一致する部分が多いのであるが、これらの説を真諦説であると明言しない点が先ず疑問である。

次に、真諦は曇無讖訳の旧訳を増補して、二十二品の『金光明經』を訳出し、さらにこれに基づき、「真諦疏」を完成した。当時、生涯をかけて真諦訳『金光明經』を三〇余遍も講述した警韶などの記事によって、真諦訳『金光明經』が流行していたのは確かである。^②しかし、吉蔵は真諦訳に従わず、曇無讖訳に注釈し、そして、その中で真諦訳の存在について一度も触れていない点も不可解なところである。

僧伝によれば、吉蔵は三十三歳から各寺の所蔵の文献を悉く収集し始め、当時の仏教文献はほとんどすべてに目を通したと言われている。しかし、この『金光明經疏』では、他の著述をほとんど引用していない上に、引用箇所を全く明言することがないのである。^③吉蔵の著述に見られる博引考証の学風とは極めて異なるものといえよう。

また、『金光明經玄義』、『金光明經文句』及び『金光明最勝王經疏』がそれぞれ引用する真諦説と、吉蔵撰とされる『金光明經疏』の内容を比較すると、吉蔵撰とされる『金光明經疏』には、真諦説とほぼ同様の内容が見られることが知られるのである。^④この疏は真諦疏の内容を知った上で作られたものであると確定できるが、真諦の名を故意に隠す目的はどこにあるかが疑問である。^⑤二四六―二四七頁、引用文中の番号、記号^①^②^③^④^⑤は奥野による補い、傍線部も奥野による

上述のような記述を踏まえ、林氏はさらに『金光明經疏』と他の三疏（智顛撰・灌頂録・金光明經文句）、同『金光明

吉蔵撰『金光明経疏』の真偽問題（奥野）

経玄義』、慧沼撰『金光明最勝王経疏』）における「真諦説」の比較表を示しているが、氏の議論の主要な点はいま示した記述、に尽きていると判断されるので、本稿ではひとまず記述、を中心に検討を加えることにしたい。

（三）林氏の所説に対して

右に示した林氏の所説を私の責任において要約してみると、次のようになる。

ア吉蔵撰といわれる現行の『金光明経疏』には、吉蔵の他の自著に対する言及がないので、その撰述時期を判断するのは極めて難しい。記述の①部分より

イ吉蔵撰といわれる現行の『金光明経疏』には、真諦（四九九 五六九）の『金光明疏』に一致する部分が多いにもかかわらず、真諦の名前を伏せて引用しているのは、他の吉蔵の著作における真諦説引用の態度、または吉蔵と真諦との深い関係から推していかにも不可解である。記述の②および③の前後の文脈より

ウ吉蔵撰といわれる現行の『金光明経疏』は、曇無讖訳『金光明経』に対する注釈であるが、吉蔵がその中で当時存在したであろうと思われる真諦訳『金光明経』の存在について一言も触れていないのは不可解である。記述の④部分より

エ吉蔵撰といわれる現行の『金光明経疏』には、他の著述の引用があまり見られないばかりでなく、典拠も明示されていない。これは博引旁証をもって知られる他の吉蔵の著作に比べると極めて異例である。記述の⑤部分より

主観的判断の範疇に属する論点になると思われる要約エに關しては、ひとまず措くとして、私の要約に誤りがないとするならば、私から見て林氏の所説には事実の誤認と重要な先行業績の見落としがあるように思われる。以下にその点を指摘しよう。

まずア(林氏の著書でいえば記述の(a)部分)の現行の吉蔵撰とされる『金光明経疏』には他の自著への言及がないというのは、事実の誤認であろうと思う。なぜなら、『金光明経疏』冒頭には、次のような記述があるからである。

序説中有一。如是我聞是証信序也。一時以下是發起序。料簡二序如涅槃義疏中説也。(大正蔵三九・一六〇下)

ここに見える「涅槃義疏」が、吉蔵が『涅槃経遊意』において「余昔経注録文疏零失、今之憶者十不存一。因茲講以聊復疏之」(大正蔵三八・一三〇上)と述懐する、現在に伝わらない散佚した『涅槃経疏』を指すことはすでに藤井教公氏が指摘しているところであり、『涅槃経疏』⁽⁸⁾がまた『涅槃義疏』⁽⁹⁾の名をもって呼ばれていたことは次の経録の記載から明らかである。

奈良朝現在一切経目録(石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』付録一一二頁)

涅槃経疏 十四卷 吉蔵

三論宗章疏(安遠録)(大正蔵五五・一一三七中)

涅槃義疏 二十卷 吉蔵述

東域伝燈目録(永超録)(大正蔵五五・一一五四上)

大般涅槃経疏 二十卷 吉蔵

新編諸宗教蔵総録(義天録)(大正蔵五五・一一六八上)

大般涅槃経疏 十四卷 吉蔵述

したがって、私は林氏が『金光明経疏』に吉蔵の自著への言及がないというのは誤りであると思う。もちろん、ここにいる「涅槃義疏」が現在に伝わらない吉蔵の『涅槃経疏』ではないという可能性も完全には否定できないことではある。しかし、その場合は別途その論証が必要になるであろう。つまり、ここにいう「涅槃義疏」が『涅槃経疏』ではないとい

うことが論証されて初めて吉藏真撰を疑う一つの根拠となり得るのである。したがって、そのことが論証されていない
 まの段階では、『金光明經疏』における『涅槃義疏』への関説は、同書の冒頭に「沙門吉藏撰」という撰号がある以上、そ
 れは吉藏の『涅槃經疏』を指示すると見ておくのが穩当であると思つのである。

次にイの論点（林氏の記述でいえば、記述の⑥および⑦の前後の文脈）を検討してみよう。

確かに引用の出典を明示せず、地の文に取り込んで援用する論述の仕方は現代の感覚からするといかにも問題であるし、
 比較的嚴正な引用態度で知られる吉藏の他著とは異質な感があることは事実かもしれない。しかし、これだけのことで
 真撰を疑う客觀的根拠とはならないであろう。例えば、藤井教公氏や吉津宜英氏が鮮やかに論証されたように、吉藏は
 『勝鬘宝窟』では慧遠（五三三 五九二）の『勝鬘義記』を何の断りもなく大幅に取り込んで注釈を行なっていたことが
 明らかにされている。また『涅槃經』に精通していた吉藏が同經を引く場合の一つの形態的特徴として、「吉藏は法華經
 その他の經典については、これを比較的正確に引用するのに対し、涅槃經の場合はほとんど要略取意、または何のこ
 りもなく多数引用している」と指摘されていることも忘れてはならない事実である。いま問題になっている『金光明經疏』
 に関しては、早くに吉藏の『金光明經疏』と智顛説・灌頂録『金光明經文句』に共通して「真諦疏」が引かれていること
 に着目して、両者の文献的交渉を追究された前記、藤井教公氏が、

真諦の疏については、吉藏は『疏』中で、真諦曰く、などとして直接に真諦を指示する引用は一つもない。真諦の名
 を出さないということは、吉藏が真諦疏を見なかったということでは決してなく、事實はむしろその逆である。後に
 出すように、吉藏が自らの『疏』の中に、真諦の名を挙げずにその解釈を紹介している例、また、真諦の説を採り込
 んで自説として述べている例をいくつか指摘することができた。このことから吉藏が真諦疏を見ていたことは明白で
 ある。今日、真諦疏は現存しないから、吉藏の『疏』が、その成立をどの程度まで真諦疏に負っているかはこれを

ることはできないが、その依存度はかなり高いものではなかったが、真諦疏への依存度が高ければこそ、吉蔵はあえて真諦の名を挙げなかったのではないかと推測されるのである。¹²⁾

と述べておられるのが、おそらくは事の真相だったのではあるまいか。要するに論点イも吉蔵真撰を疑つ客観的、決定的根拠にはならないのであり、すべては想像の領域を出るものではないことがご理解いただけたであらう。

さて次にウの論点（林氏の記述でいえば、記述の③部分）について検討してみたい。林氏の見解に従えば、『金光明経疏』には真諦訳『金光明経』七巻への言及が見られず、これは不可解なことであるということになる。しかし、これは明らかな事実の誤認である。なぜなら『金光明経疏』は、その冒頭から明らかに真諦訳七巻『金光明経』へ言及しているからである。以下にその例、三例を示したい。

i 金光明経者、乃是究竟大乘菩薩藏攝、是頓教所收。論其宗極表三種三法。一表三身仏果、二表涅槃三徳、三表三種仏性。表三身者、金体真實譬法身仏、光用能照譬心身仏、明能遍益猶如化身。第二譬三徳者、以金体四義譬法身四徳。色無変如常。体無染如淨。転作無礙如我。令人富貴如楽也。次光有二義。能照能除如般若。次明有兩義。無闇広遠如解脱総無衆患。第三表三種仏性者、金体本有如道前正因。光用始有如道内了因。明は無闇如道後至果。以金等三義譬三種三法。故言金光明経也。与序品如常釈也。此三種三義具在七巻也。（大正蔵三九・一六〇中）

ii 就第二中先明集衆。爾時四仏下以偈広釈。諸水須弥大地虚空雖復難知、並是有相之法、可以意知、可以言論。而三身仏果三而恒一、一而恒三。然則非一非三。体不可以智知、相不可以言論、無有數量算計也。又復法身本有無有生滅。報仏与之相心、亦無生滅。是故大経云、諸仏所師所謂法也。以法常故諸仏亦常。又化身如來以一仏為体、以衆生為縁。体無尽故化身亦無尽也。故云三身常住。如七巻經中明。（大正蔵三九・一六二上）

iii 懺悔以下三品明經体。第二辨修道門。果不自得、要因修道。故次明之。即是因門中宗明緣因。若論正因、在七卷經三身品中。此經略無。（大正藏三九・一六二中）

ここにいう「七卷」「七卷經」が真諦訳の『金光明經』七卷を指すことに疑問の余地はないであろう。⁽¹⁴⁾ そもそも、私見によれば、吉藏の『金光明經』依用はその初期の撰述書である『法華玄論』から一貫して真諦訳七卷『金光明經』ではなかったかと思われるのである。すなわち、『法華玄論』卷第九には、次のような記述がある。

問。首楞嚴經云、本願力故現法尽、三昧力故示碎身舍利。大品即积此經云、如来碎金剛身作末舍利。此一經明有舍利。新金光明云、仮使水蛭虫、口中生白齒、如来身舍利畢竟不可得。乃至鼠登兔角梯、食月除修羅、如来身舍利畢竟不可得。此經無舍利。有無相違、云何領會耶。（大正藏三四・四三四中）

ここにいう「新金光明」とは、常識的に考えて真諦訳七卷か隋の宝貴が合採したとされる『合部金光明經』八巻しかあり得ないが、『合部金光明經』の成立を隋の開皇十七年（五九七年）⁽¹⁵⁾とすると、『法華玄論』の撰述時期との関係から吉藏が『合部金光明經』を披見し得たか否かは微妙な問題であり、むしろ後掲の参考資料からも知られるように吉藏は『法華義疏』や『法華遊意』でも一貫して「七卷金光明經」といつているから、その依用は当初から真諦訳七巻であったと見る方がより自然であろうと思われるのである。⁽¹⁶⁾

なお、吉藏が引く「新金光明」とある部分の当該典拠は、必要上止むを得ず、『合部金光明經』でこれを示すと巻第一「寿量品」の

如来寂靜身 無有舍利事 仮令水蛭蟲 口中生白齒 如来解脫身 終無繫縛色 兔角為梯橙 從地得昇天 邪思惟舍利 功德無是處 鼠登兔角梯 蝕月除修羅 依舍利尽惑 解脫無是處。（大正藏一六・三六二上）

とある部分がそれに相当するが、この部分は曇無讖訳にはもちろんない箇所、現行の大正藏經所収の『合部金光明經』によれば、この部分は闍那崛多(五三三 六〇〇)訳によって補われたものであるといつ(21)。しかし、大正年間に真諦訳の第一巻が発見されたことにより、真諦訳にも右の箇所が存在したことが明らかとなった。したがって、吉蔵が『法華玄論』撰述の段階で真諦訳を見ていたと考えることに何らの問題はないと思われる。

以上要するに『金光明經疏』に真諦訳の言及がないというのは事実の誤認であり、同疏には明らかに真諦訳「七卷」「七卷經」への闕説がある。同疏が「七卷」「七卷經」といって真諦訳に言及していることは、むしろ他の吉蔵の著作中における真諦訳『金光明經』への言及の仕方から帰納的に考えて、林氏の主張とは裏腹に、『金光明經疏』の吉蔵真撰を裏付ける一つの傍証になるように私には感じられるのである。

(四) おわりに

林氏の所論は上記に尽きるものではなく、私自身大変参考になった論述も数多くあるが、氏が吉蔵の真撰を疑われた主要な論点については、私なりの見解を提示できたと思うのでひとまず本稿を閉じておきたい。

上述したように、本稿において私は、林氏のいわれる偽撰説は成立しないのではないかといつことを主張してきたが、かといつて積極的に吉蔵真撰を論証したというでもない。私の立場は、偽撰説が完全に論証されるものでない以上、取りあえずは吉蔵の撰述と見なしておこうといった極めて消極的なものになすべきなのなのである。

最後に、本稿において私はことさらに事実の誤認や先行業績の見落としを論おうとしたのではない。なぜなら、そうしたことは他ならぬ私自身が数多く犯していることであり、またある意味ではそうした誤りを指摘するだけなら、それはとても虚しいことだからである。しかし、何よりもお互いが共通して目指すことが事実の解明にあるとするならば、本稿も

吉蔵撰『金光明経疏』の真偽問題（奥野）

また必要であったことをご理解いただければ幸いです。そして、私の誤読や誤解に対しては、忌憚のない厳しいご批判をお願いしたい。

なお、多くの見落としがあることを恐れるが、かつて私が吉蔵著書中における『金光明経』の引用を調べたノートの中から法華疏に限って、その引用箇所を【参考資料】として本稿末に掲載したので何かの参考になれば幸いです。

注

(1) 林鳴宇『宋代天台教学の研究』『金光明経』の研究史を中心として（山喜房仏書林、二〇〇三年九月六日の奥付）。私は本年十月七日（火）に、郵送によって林氏より本書の惠贈を受けた。ここに厚く御礼申し上げます。

本書は「序論」「本論」「結論」からなり、「本論」は次の三篇によって構成されている。

第一篇 宋代天台に於いて『金光明経』の研究に関わった人物の研究

第二篇 宋代天台における『金光明経』の論争史の研究

第三篇 宋代天台における『金光明経』修懺作法の研究

(2) 本書第二篇第二章は「天台智顛の『金光明経』研究の背景」と題され、次のような節立てとなっている。

第一節 『金光明経』研究の歴史的課題

第二節 真諦の『金光明疏』

第三節 吉蔵の『金光明経疏』

第四節 智顛の『金光明経玄義』と『金光明経文句』の内容

(3) 日本宗教学会第六二回学術大会（二〇〇三年九月四日第四部会、於天理大学）における発表。私は林氏のご発表を直接には拝聴していないが、日本宗教学会学術大会に引き続き開催された日本印度学仏教学会学術大会（二〇〇三年九月七日、於仏教大学）の席上、林

氏にその発表資料を恵んでいただき、発表内容の概要を知ることができた。私の理解する限り、学会発表の内容は前注(1)のご著書のそれと基本的に同じであり、ほとんど変更は見られない。ただ、林氏が学会発表の結論として述べられた『金光明経疏』は真諦と深い縁を持った吉蔵の著書であるとは考えにくい。恐らく、初唐や中唐の者、ないし同時代の朝鮮半島や日本の僧侶が吉蔵の名を借りて編集したものであると考えられる。(発表資料より、傍線部は奥野)という見解は、ご著書の「本書は真諦と深い縁を持った吉蔵の著書であるとは考えにくい。恐らく初唐や中唐の者が吉蔵の名を借りて編集したものと考えられる」(二五三頁)という見解よりはやや踏み込んだ主張となっているようである。しかし、この見解は憶測に憶測を重ねたものであるに過ぎない。

(4)この点については、伊藤隆寿氏の「三論学派と三論宗 三論思想史の研究課題」(『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』第一五号、一九八一年十二月)を参照されたい。

(5)『仏書解説大辞典』(大東出版社)における花山信勝氏「解説」の項、参照。林氏も指摘しているように、花山氏はここで『金光明経疏』を「惟ふに、吉蔵六十歳前後の作か」と述べておられる(同辞典第三巻、四二五頁)。

(6)平井俊榮『肇論・三論玄義』(大乘仏典 中国・日本篇 第一巻、中央公論社、一九九〇年)の「解説」参照。平井氏はこの「解説」の中で『金光明経疏』を真撰とし、同疏を吉蔵の長安時代の著作であるとしている(同書、四〇八頁)。但し、平井氏は、同「解説」における著作年代の推定は、「時代別にいく大まかに配列したもの」(四〇九頁)に過ぎないもので、厳密な考証をなしたものでないことを断っておられる。

(7)私のいう重要な先行論文とは、次の二つの論文である。すなわち、藤井教公氏の「天台と三論の交渉 智顛説・灌頂録」『金光明経文句』と吉蔵撰『金光明経疏』との比較を通じて」(『印度学仏教学研究』第三七巻第二号、一九八九年三月)および三桐慈海氏の「法華統略の仏身観」(『大谷学報』第五五巻第四巻、一九七六年二月)という論文がそれである。私よりすれば、林氏は「吉蔵撰『金光明経疏』の真偽について」を論じるに際し、真つ先にこの二氏のご論文を参照すべきであったと思う。

さて、藤井氏はこの論文の中ですでに、智顛説・灌頂録『金光明経文句』と吉蔵撰『金光明経疏』に共通して「真諦疏」が引用され

吉蔵撰『金光明経疏』の真偽問題(奥野)

吉蔵撰『金光明経疏』の真偽問題（奥野）

ていることに着目して、両者の文献的交渉を論じている。藤井氏の問題意識が、平井俊榮氏の『法華文句の成立に関する研究』（春秋社、一九八五年）を受けていることは明白であり、藤井氏は明言されておられないが、藤井氏の念頭にあったのはおそらくは平井氏の『現存する智顓と吉蔵に共通する経典註疏間の相互の依用関係は、ほとんど例外なく吉蔵疏から智顓疏へという参照依用の跡が顕著に見られ、その逆は全く見られないことが判明したのである。このことは、智顓撰と伝えられる現存註疏の多くが、智顓の著述であり得ないことは勿論、その講説を門人が筆録したものというのも多分に疑わしく、むしろ灌頂その他の門人によって、吉蔵疏の成立以降に、これを参照し依用して書かれたことを証するものである』（前掲平井書、「はしがき」ii頁）という記述でなかったかと思われる。それはともかく、藤井氏は両疏を対照して得られたこの論文の結論として、「以上、天台と三論吉蔵の両者に共通に存する『金光明経』の疏についてこれに検討を加えてきた。その結果、天台の『文句』（及び『玄義』）と吉蔵の『疏』とは、両者とも真諦疏を見しており、随時それを引用・援用していることがわかった。その引用・援用の形態としては、天台の場合は「真諦云」としてその名を出すことが多いが、吉蔵の場合は一切その名を出さず、真諦疏をそのまま自説としてとりこんでいる例が目立った。また、天台の場合は、真諦疏を引く際には破斥の対象として引き、その後自説を展開していることが多い。それ故、両者とも真諦疏という同一のものに拠りながら、その両者の解釈はかなり違ったものとなっている。（中略）以上のことから推して、天台と三論吉蔵における文献的交渉は、『金光明経』の注釈書類に関するかぎり、両者の間に存在しないといってもよいであろう。それは、これまで指摘されている『法華文句』や『維摩経疏』などの一連の灌頂修治の著作とは大いに異なるものである」（縦一―三頁上 下、傍線部は奥野）と述べておられる。なお、藤井氏には天台と三論の文献交渉という同様の問題意識から書かれた論文として、「天台と三論の交流 灌頂の『法華玄義』修治と吉蔵『法華玄論』をめぐる」（鎌田茂雄博士還暦記念論集『中国の仏教と文化』大蔵出版、一九九八年）があることも付記しておく。

次に「法華統略の仏身観」を論じた三桐氏の論文では、吉蔵の初期の法華疏である『法華玄論』や『法華義疏』では『法華論』（『妙法蓮華経曼波提舎』）が吉蔵の「仏身義」の重要な論拠とされているのに対し、後期の著作である『法華統略』では概ね『金光明経』

に拠って議論が展開されていることとその理由については詳細に論じられている。また、三桐氏はこの論文の中で、「吉蔵と金光明経」という一項を設けて、「吉蔵と『金光明経』との関係について論じている。また、三桐氏は前注(5)(6)に見た花山信勝氏や平井榮氏の見解とは違つて、「江南においては、かつて智顛は『金光明経』を講説したが、それは曇無讖訳の四卷本についてのものではなかつた。吉蔵にも『金光明経疏』一巻があり、やはり四卷本についての釈である。これがいつ頃に撰述されたものであるかは明らかではないが、恐らく『法華義疏』などを著わした時期に遠くはなく、入京以前であると思われる。」(二五頁下、二六頁上、傍線部は奥野)と述べられ、『金光明経疏』の初期撰述(会稽嘉祥寺時代)を示唆されている。本稿末の「付記」にも記したように、私も『金光明経疏』は吉蔵の会稽時代の撰述かとの印象を抱くがそれは印象に過ぎず論証できない。したがって、私自身は、『金光明経疏』の撰述時期に関しては、いまの段階では後注(8)に見る藤井教公氏の穩当な見解に従つておきたい。

(8) 前注(7)の藤井氏論文「天台と三論の交渉 智顛説・灌頂録・金光明経文句」と吉蔵撰『金光明経疏』との比較を通じて「参照。藤井氏はこの事実にもとづいて、『金光明経疏』の撰述時期を「その成立時期は明らかではないが、『疏』中で、会稽嘉祥寺時代(五八九-五九七)に成つたとされる『涅槃経疏』にその説明を譲つているところがあるので、それ以後の成立であることは間違いない。またその『涅槃経疏』は、後年成立の『涅槃経遊意』の冒頭で吉蔵自ら「早くに散佚したと述べているから、『疏』成立の下限は『涅槃経遊意』の成立以前である」と推測される。」(縦一〇九頁)と述べられる。客観的判断材料が乏しい以上、藤井氏の推定は極めて穩当な推定であると評価されよう。前注(5)や(6)の花山氏や平井氏の見解はもしかしたらその下限を示したものだつたのかも知れない。

(9) 吉蔵の『涅槃経疏』については、平井俊榮「吉蔵撰『涅槃経遊意』国訳」、『駒澤大学仏教学部論集』第三号、一九七二年十二月)の「解題」および平井俊榮「中国般若思想史研究 吉蔵と三論学派」(春秋社、一九七六年)の第二篇第一章「吉蔵の著作」(第三節)三三八-三六六頁)を参照。なお、『涅槃経疏』の逸文を集めた論文に、平井俊榮「吉蔵著『大般涅槃経疏』逸文の研究」(上)、『南都仏教』第二十七号、一九七一年十二月)、同「吉蔵著『大般涅槃経疏』逸文の研究」(下)、『南都仏教』第二十九号、一九七二年十二月)が

吉蔵撰『金光明経疏』の真偽問題（奥野）

ある。また、『涅槃経疏』（『涅槃義疏』）の我が国における書写状況については、木本好信氏の労作『奈良朝典籍所載仏書解説索引』（国書刊行会、一九八九年一月）三五四、三五六頁によって、われわれは、『大日本古文書（正倉院文書）』中における記載の状況を容易に検索することができる。それによれば、天平十五年（七四三年）頃から神護景雲二年（七六八）年頃まで、『涅槃経疏』（『涅槃義疏』）は吉蔵の著作と認識されて盛んに書写されていたことがわかる。

- (10) 藤井教公「浄影寺慧遠撰『勝鬘義記』卷下と吉蔵『勝鬘宝窟』との比較対照」（『常葉学園浜松大学研究論集』第二号、一九九〇年）および吉津宜英「吉蔵の大乗起信論引用について」（『印度学仏教学研究』第五〇巻第一号、二〇〇一年十二月）参照。吉津氏は前掲論文の中で、吉蔵の『勝鬘宝窟』中における『起信論』への言及箇所ほとんどがその前後の文脈を含めて慧遠の『勝鬘義記』からいわゆる孫引きであったことを論証している。この事実は、吉蔵と『起信論』との関係、『起信論』真諦訳出をめぐる諸問題という点ばかりでなく、吉蔵の著述実態を考える上でも極めて貴重な視点を提供したといえよう。

- (11) 前注（9）の平井書第二篇第三章「吉蔵の經典観と引用論拠」第四節「吉蔵における『涅槃経』引用の形態と特質」参照。平井氏は、この中で泰本融氏の見解（泰本融「中観論疏解題」、『国訳一切経』論疏部 六、一一—一二頁）を受けて、「吉蔵が自己の章疏に涅槃経を引用する場合、これを形式的にみても、他の大乘諸経論の引用に比べてかなり特徴的である。その一つとして泰本融博士は、吉蔵は法華経その他の經典については、これを比較的正確に引用するのに対し、涅槃経の場合はほとんど要略取意、または何のこともなく多数引用していると指摘している。これは、吉蔵が他の諸経論よりも一層涅槃経に精通していたことを暗黙のうちに物語っているといえよう」（五三三頁）と述べている。

- (12) 前注（7）藤井論文、縦一〇九頁参照。なお、引用文中における傍線部は奥野による。

- (13) 真諦訳の七巻『金光明経』および『合部金光明経』を含めた『金光明経』の諸訳に対する解題については、最近発表された吉津宜英氏の「真諦三蔵訳出経律論研究誌」、『駒澤大学仏教学部研究紀要』第六一号、二〇〇三年三月）を参照されたい。また、鎌田茂雄『中国仏教史』第四卷第二章第二節「真諦三蔵の翻訳活動」（東京大学出版会、一九九〇年）三七—六九頁もあわせて参照されたい。

(14) 吉蔵が『法華義疏』や『法華遊意』、あるいはその他の著作において真諦訳の七巻『金光明経』を依用していることは、すでに前注(7)の三桐論文がこれを指摘している。

(15) 吉蔵の著作の撰述時期に関しては、前注(9)の平井書第二篇第一章「吉蔵の著作」の「第二節、撰述の前後関係」、および菅野博士『中国法華思想の研究』第一篇第一章「吉蔵の法華経疏の基礎的研究」の「第一節、吉蔵の法華経疏の撰述順序」(春秋社、一九九四年)を参照。

(16) 『合部金光明経序』(大正蔵一六・三五九下)による。なお、『合部金光明経』訳出の経緯に関しては、前注(13)の吉津論文、鎌田書を参照されたい。

(17) 『法華玄論』の撰述時期に関しては、拙稿『法華玄論』の撰述時期について(『仏教史学研究』第三卷第一号、一九八八年六月)および前注(15)の平井書三五九 三六〇頁参照。平井氏は『法華玄論』の成立を五九六年とされ、私は五九四年前後の成立を主張した。いずれにしても、その成立は『合部金光明経』が成ったとされる五九七年以前であり、私や平井氏の推定が正しいとすれば、常識的には吉蔵の『合部金光明経』依用は考えられないことになる。

(18) 本文末に掲載した【参考資料】「吉蔵法華疏における金光明経の引用」を参照していただきたい。

(19) 吉蔵の依用した『金光明経』がいずれの訳なのかは、前注(7)の三桐論文でも意識されている。

(20) 平井俊榮氏は、前注(9)の平井書第二篇第三章「吉蔵の經典観と引用論拠」の「第三節、吉蔵著作の引用経論」の注(3)において、本稿でも問題にした『法華玄論』巻第九の「新金光明経」の用例に注意され、『金光明経』は、北涼曇無讖訳四巻が吉蔵の頃すでに存在していたが、吉蔵は『法華玄論』巻九(大正蔵三四・四三四中)に「新金光明経云」と称している所から、吉蔵の依用したのは隋宝貴合『合部金光明経』八巻である(同書、五二九頁注)3)とされているが、これは真諦訳の存在しない現在、吉蔵の引用箇所を示そうと思えば『合部金光明経』に拠らざるを得ないので、止むを得ず『合部金光明経』と述べられたものと推測される。

(21) 現行の『合部金光明経』には、「爾時信相菩薩摩訶薩。聞是四仏宣説如来寿命無量。深心信解歡喜踊躍。説是如来寿命品時。無量無辺

吉蔵撰『金光明経疏』の真偽問題（奥野）

阿僧祇衆生。発阿耨多羅三藐三菩提心。時四如来忽然不現（下嶮多訛補）（大正蔵一六・三六〇下）とあるので、三六〇頁下段二二行目以降の記述は闇那嶮多（五二三 六〇〇）によって補われたものであることがわかる。

(22) 二楞學人「法宝連璧（一）」、真諦訳金光明経広寿量品 仏教研究上、稀有の重要資料」（『現代仏教』第三卷第二号、一九二六年一月）参照。なお、この論文の存在は前注（13）の鎌田『中国仏教史』第四巻において知ることを得た。記してその学恩に深謝したい。

(23) 林氏が今回「吉蔵の『金光明経疏』」を論じられた部分には、参考とすべき記述が少なくないし、また総頁約八百五十頁にならんとする（著書中において、本稿で考察の対象とした箇所は美質わずか八頁に過ぎない。したがって、本稿で指摘したような問題をご著書全体に波及させて考えるべきではなく、私自身も毛頭そのようには考えていないことを特にここに強調しておきたい。

（二〇〇三年十一月二十七日、脱稿）

【参考資料】

「吉蔵法華疏における金光明経の引用」

- 一、吉蔵法華疏の掲載順序は撰述順とした。
- 一、資料中の菅野『統略（下）』とは、菅野博史氏の法華経注釈書集成七『法華統略（下）』大蔵出版を指す。
- 一、『金光明経』の典拠の指摘は、すべて『合部金光明経』による。

A 『法華玄論』巻第九（大正蔵三四・四三四中）

問。首楞嚴経云、本願力故現法尽、三昧力故示碎身舍利。大品即釈此経云、如来碎金剛身作末舍利。此二経明有舍利。新金光明云、仮使水蛭虫、口中生白齒、如来身舍利畢竟不可得。乃至鼠登兔角椽、食月除修羅、如来身舍利畢竟不可得。此経無舍利。有無相違、云何領会耶。

『合部金光明經』卷第一「壽量品」(大正藏一六・三六二上)

如來寂靜身 無有舍利事 飯令水蛭蟲 口中生白齒 如來解脫身 終無繫縛色 兔角為梯橙 從地得昇天 邪思惟舍利 功德無是処 鼠登兔角梯 蝕月除修羅 依舍利尽惑 解脫無是処。

B 『法華玄論』卷第九(大正藏三四・四三七中)

一合本合迹。如金光明但辨一本一迹也。故云、仏眞法身、猶如虛空、応物現形、如水中月。

『合部金光明經』卷第五「四天王品」(大正藏一六・三八五中)

爾時四王。即從坐起偏袒右肩。右膝著地長跪合掌。於世尊前以偈讚曰。

仏月清淨 滿足莊嚴 仏日暉曜 放千光明 如來面目 最上明淨 齒白無垢 如蓮華根 功德無量 猶如大海 智淵無辺 法水具足 百千三昧 無有欠減 足下平滿 千輻相現 足指網縷 猶如鵝王 光明晃曜 如宝山王 微妙清淨 如鍊眞金 所有福德 不可思議 仏功德山 我今敬礼 仏眞法身 猶如虛空 応物現形 如水中月 無有障礙 如焰如化 是故我今 稽首仏月。

C 『法華義疏』卷第二(大正藏三四・四八一上)

又依撰大乘七卷金光明意、前得法身究竟名無餘、心化兩身非究竟為有餘。三身品又云、三身合論即是無住処涅槃。心化一身不住涅槃、法身亦不般涅槃。不般涅槃者、法身本來常寂滅故不入涅槃。即是法身不住生死名無住処涅槃也。

『合部金光明經』卷第一「三身分別品」(大正藏一六・三六三中)

善男子。依此二身一切諸仏說有餘涅槃。依法身者說無餘涅槃。何以故。一切餘究竟尽故。依此三身一切諸仏說無住処涅槃。何以故。為二身故不住涅槃。離於法身無有別仏。何故二身不住涅槃。二身仮名不実念念滅不住故。數數出現以不定故。法身不爾。是故二身不住涅槃。法身者不二。是故不住於般涅槃。依三身故說無住涅槃。

吉藏撰『金光明經疏』の真偽問題（奥野）

D 『法華義疏』第三（大正藏三四・四八三下）

問。大品已明一切法皆入大乘。与法華何異。

答。大品已會於法但未會人。會法者、欲明大乘無法不攝。故大品云、若有実語損一切善法者波若是也。未會人者、但二乘人至大品時大機未熟、故未會人。法華則人法俱會、會人故同名菩薩、會法名為一乘。又攝大乘論云、有二種會。一顯會、二密會。密會者、如大品明、一切諸法皆入大乘。顯會者如法華會人也。又有二會。一理會、二教會。理會者、如大品明、一切諸法皆入実相。実相既無一。豈有三乘異耶。七卷金光明經云、法界無二故乘無有三。但未會三教故不名教會。法華理教俱會。

『合部金光明經』卷第三「陀羅尼最淨地品」（大正藏一六・三七六下）

法界無分別 是故無異乘 為度衆生故 分別說三乘。

E 『法華義疏』卷第四（大正藏三四・五〇八下）

問。仏為衆生故出世、自心說法。何事待請耶。

答。論云、仏雖不須請而令請者獲福。七卷金光明云、請仏轉法輪、能滅誘十二部經罪。

『合部金光明經』卷第二「業障滅品」（大正藏一六・三六九中）の取意か。

善男子。復有四種最大業障。難可清淨。何者為四。一者於菩薩律儀犯極重惡。二者於大乘十二部經心生誹謗。三者於自身中不能增長一切善根。四者貪著有心想。又有四種対治滅業障法。何者為四。一者於十方世界一切如來。至心親近懺悔一切罪。二者為十方一切衆生。勸請諸仏説諸妙法。三者隨喜十方一切衆生所有成就功德。四者所有一切功德善根。悉以迴向阿耨多羅三藐三菩提。

F 『法華義疏』卷第十（大正藏三四・六〇三中）下）

第四開合門者、經論之中説仏開合不定。大明四句。一本迹俱合、二本迹俱開、三開本合迹、四開迹合本。本迹俱合、或合名一仏。謂三寶

中一仏宝也。或開為二身。故云、仏眞法身猶如虚空、応物現形如水中月。既但有一迹一本。亦是本迹俱合。或開為三。而三義不定。一者如七卷金光明辨。三仏者一法、二心、三化。法身為眞、餘二為心。此則合眞為一、開心為二。二者法華論列三仏。謂法報與化。即是開真合心。開眞者、開法報為二也。合心者、以心身為一。此意明本有義為法身。酬因義名報、応物義名心也。

次開四仏者、此義亦有一種。一者楞伽經明四仏。一応化仏、二功德仏、三智慧仏、四如化仏。彼經云、初一為心、後三為眞。此亦合心開眞也。三仏之中功德智慧為報仏、如如為法身。二者如七卷金光明辨於四句。一化而非心、謂仏入涅槃已為物示龍鬼等身、故名之為化。不示仏身故名非心。二者心而非化。經云、謂為地前身。釈者云、地前菩薩所見仏身。乃從三昧法門中現。名之為心。非六趣攝所以非化。三者亦心亦化。經云、住有餘涅槃身。釈者云、声聞所見仏身。彼見如來相好形修之成仏。故名為心。見仏在人中受生同人類。故名為化。四非心非化。謂法身。四句之中前三並心、後一為眞。亦是開心合眞也。真心俱開者、真中分二、法之与報、心中分二、心之与化。

『合部金光明經』卷第五「四天王品」(大正藏一六・三八五中)

爾時四王。即從坐起偏袒右肩。右膝著地長跪合掌。於世尊前以偈讚曰。

仏月清淨 滿足莊嚴 仏日暉曜 放千光明 如來面目 最上明淨 齒白無垢 如蓮華根 功德無量 猶如大海 智淵無辺 法水具足 百千三昧 無有欠減 足下平滿 千輻相現 足指網縵 猶如鵝王 光明晃曜 如宝山王 微妙清淨 如鍊真金 所有福德 不可思議 仏功德山 我今敬礼 仏眞法身 猶如虚空 応物現形 如水中月 無有障礙 如焰如化 是故我今 稽首仏身。

G 『法華義疏』卷第十(大正藏三四・六〇九中)下)

今次論淨穢兩土辨仏依果。正果之義心身示滅、法身不滅。依果之義穢土自毀、淨土不燒。故身但本迹、土唯淨穢。欲辨斯義故有此文來也。此品既有淨土、今略論之。法華論釈此品明有三身。今對三身亦有三土。一者法身、栖実相之土。普賢觀云、釈迦牟尼名毘盧遮那遍一切処。其仏住処名常寂光。即法身土。故仁王經云、三賢十聖住果報、唯仏一人居淨土。瓔珞經云、亦以中道第一義名法身土。然諸法寂滅相不可言宣。孰論身与不身。亦何土与非土。但無名相中為衆生故仮名相説。故明身与土。雖開身土二実未会一。但約義不同故分為兩。能栖之

義說之為身、所栖之義目之為土也。如七卷金光明三身品、具有如如智及如如境、就義而望境即土也。二者報身報土。但報身即是心身、心身有二種。一内一外。内与法身相应名曰心身。此猶屬法身、与法身同土。法華論云、我淨土不毀而衆見燒尽者、報仏如来真實淨土第一義撰故。此即是報身土也。若外心之義名為報身。化大菩薩於淨土成佛。此以宝玉為淨土。此土乃不為劫火所燒而終有尽滅。所以然者、今開身有常無常三句。一者法身但常非無常、二化身但無常非常、三者心身亦常亦無常。内心身義名之為常、外心之義名為無常。身既三種土亦例然。法身之土但常非無常。化身之土但無常非常。心身之土亦常亦無常。内心身土此即是常。外心身土此即無常也。若分淨穢二土者、法報二土此是淨土。然化身之土此即不定、或淨或穢。

『合部金光明經』卷第一、「三身分別品」（大正藏一六・三六三下）

善男子。離無分別智更無勝智。離法如如無勝境界。是法如如如智。是一種如如如不一不異。是故法身。慧清淨故。滅清淨故。是二清淨。是故法身具足清淨。

H 『法華遊意』（大正藏三四・六三六中）

問。三身云何辨於權實。

答。法身但實而非權。化身但權而非實。心身有二句。一者内、与法身相应名為心身。法身既常故心身亦常。此即心身是實而非權。故涅槃經云、諸仏所師所謂法也。以法常故諸仏亦常。二者外、与大機相应淨土成佛故名心身。此之心身是權而非實。故七卷金光明云、心化兩身是假名有、非是真實。念念生滅故名曰無常。則其証也。既識三義、即便識仏。故今念仏三昧倍復增益。又合此三種以為一義。前之一義以明身之權實、後之一義以明壽之權實。涅槃經亦明長壽与金剛身。所以但明此二者、衆生唯有形与壽命。隨順之亦明斯二也。

『合部金光明經』卷第一、「三身分別品」（大正藏一六・三六三上）

善男子。云何菩薩摩訶薩了別法身。為欲滅除一切諸煩惱等障。為欲具足一切諸善法故。惟有如如如如智。是名法身。前一種身是假名有。是第三身為真有。

同じく卷第一「三身分別品」(大正蔵一六・三六三中)

善男子。依此一身一切諸仏説有餘涅槃。依法身者説無餘涅槃。何以故。一切餘究竟尽故。依此三身一切諸仏説無住処涅槃。何以故。為一身故不住涅槃。離於法身無有別仏。何故一身不住涅槃。一身仮名不実、念念滅不住故。数数出現以不定故。法身不爾。是故一身不住涅槃。法身者不二。是故不住於般涅槃。依三身故説無住涅槃。

I 『法華遊意』(大正蔵三四・六四一上)

十者若言品題如來寿命便是無常者。此有四句。一無量説無量。如涅槃云、唯仏觀仏其寿無量。二有量説有量。如釈迦方八十年。三有量説無量。如無量寿仏。四無量説於有量。如金光明經乃至此經。亦如花嚴云、如來深遠境界其量齊虚空也。

『合部金光明經』卷第一「寿量品」(大正蔵一六・三六〇下)

积尊寿命 不可計劫 億百千万 仏寿如是 無量無辺

J 『法華遊意』(大正蔵三四・六四一中)

三者復有衆生不聞法花、直聞涅槃而得悟者。相伝云、宝性論云、大品等為利根菩薩説、法華為中根人説、涅槃為下根人説、又如雖同是波若而波若有無量部、雖同明常、明常何妨亦有多部耶。如七卷金光明已広明常住、可得復説涅槃耶。

『合部金光明經』卷第一「寿量品」(大正蔵一六・三六〇下)

积尊寿命 不可計劫 億百千万 仏寿如是 無量無辺。

K 『法華統略』卷上本(正統蔵経四三・二右)

第一伐累根之功称者、前義為顯理。今除累根、累根者、謂取著也。由取相故生煩惱、由煩惱故起業、由業故至苦。是故金光明云、如從妄

吉蔵撰『金光明經疏』の真偽問題(奥野)

吉藏撰『金光明經疏』の真偽問題（奥野）

想思惟故生煩惱。則知著是六道之本亦是三乘之根。

『合部金光明經』卷第一、「二身分別品」（大正藏一六・三六三上）

善男子。譬如依妄想思惟。說種種煩惱。說種種業。說種種果報。

L 『法華統略』卷上本（卍統藏經四三・五右）

將法例人者、亦具三。一者將一破二。唯有一法身、無有心化。心化非是實。故金光明經云、是二身者、是假名有也。

『合部金光明經』卷第一、「二身分別品」（大正藏一六・三六三中）

何故二身不住涅槃。二身假名不實念念滅不住故。數數出現以不定故。法身不爾。是故二身不住涅槃。

M 『法華統略』卷上末（卍統藏經四三・三四左上 左下）

依江南法華師、不得云居法身地見。以法華經未辨常住法身故也。依關東智度論師、亦不得云居法身地見。彼以實相為法身。實相體非覺故、法身非見。但能生於覺故名覺、能生於見故名見。撰論師云、法身是真如。亦非見義。心身乃是見耳。今用金光明三身品、以釈此文。彼

云、法身者、謂如如境及如如智。如如智、即利益眾生。名為仏眼。是覺他義。如如境、是自利。即如如智所照之境。智照此境。謂自照義。故法身仏得有自覺覺他兩義、故名法身仏。仏者、覺也。豈有是法身仏而非覺哉。

『合部金光明經』卷第一、「二身分別品」（大正藏一六・三六三上）

善男子。云何菩薩摩訶薩了別法身。為欲滅除一切諸煩惱等障。為欲具足一切諸善法故。惟有如如如如智。是名法身。

N 『法華統略』卷下本（菅野『統略』（下）『七二四頁）

問曰。何故明衆生不知異、不辨衆生不知同。

答曰。五乘衆生是異。尚不知異。竟非同。云何知同。終歸於空者、既常寂滅、亦常歸空。又既常寂、則知聞熏習本寂實不滅也。又前明歸種智、謂如如智、後明歸涅槃空、歸如如境。金光明以此二事為法身。今明歸此一也。

『合部金光明經』卷第一、「三身分別品」(大正藏一六・三六三上)

善男子。云何菩薩摩訶薩了別法身。為欲滅除一切諸煩惱等障。為欲具足一切諸善法故。惟有如如如智。是名法身。

O 『法華統略』卷下本(菅野)統略(下)『七三五頁)

仏説生滅教、令作生滅觀得度三百。生滅觀者、有愛見惑生、入空觀斷之令滅、謂生滅觀。愛見若滅、便度三界、名度三百。為諸菩薩説無生滅教、令作無生滅觀。金光明云、無明体性本自不有、無所有、故仮名無明。

『合部金光明經』卷第四「空品」(大正藏一六・三七九下)

無明体性 本自不有 妄想因縁 和合而生 無所有故 仮名無明 是故我說 名曰無明。

P 『法華統略』卷下本(巳統藏經四三・七二右下)

然所乘法中既具三義、能乘之人亦具三義。一用一破二。唯法身是實、餘一身非真。金光明云、唯法身是實、餘一身是仮名有、非真實也。

『合部金光明經』卷第一、「三身分別品」(大正藏一六・三六三上)

前一種身是仮名有。是第三身名為真有。

Q 『法華統略』卷下本(巳統藏經四三・七二左上)

問曰。何以知分身仏是三身中心耶。

答。此經叙十方分身皆是淨土純有菩薩無有二乘。而同性經金光明撰論等、皆明心身化菩薩居淨土化身化二乘住穢國也。

吉藏撰『金光明經疏』の真偽問題(奥野)

吉藏撰『金光明經疏』の真偽問題（奥野）

『合部金光明經』卷第一「三身分別品」（大正藏一六・三六二下 三六三上）

善男子。菩薩摩訶薩。一切如來有三種身。菩薩摩訶薩皆心當知。何者為三。一者化身。二者心身。三者法身。如是三身攝受阿耨多羅三藐三菩提云何菩薩了別化身。善男子。如來昔在修行地中。為一切衆生修種種法。是諸修法至修行滿。修行力故而得自在。自在力故隨衆生心。隨衆生行。隨衆生界。多種了別不待時不過時。處所相心。時相心。行相心。說法相心。現種種身。是名化身。善男子。是諸如來。為諸菩薩得通達故說於真諦。為通達生死涅槃一味故。身見衆生怖畏歡喜故。為無辺佛法而作本故。如來相心如如智願力故。是身得現具足三十二相八十種好頂背円光。是名心身。

R 『法華統略』卷下本（卍統藏經四三・七二左下）

問曰。撰論云、二乘及地前菩薩見化身仏、登地已上方見心身。今云何二乘普見心身。

答曰。金光明云、有四句。一者心身非化身。謂地前身。則知心身位。通從地前。乃至登地。皆有心身。今撰論云、初地見心身者、此明初地已上見真如故。心身与真如相心者、即是内心身。取本有義。名法身。与如相心。始有之義。名心身。初地已上、見此心身也。今言分身為心身者、此是外心身。位通上下。今約大小二人。故開二身。化菩薩為心身。化二乘名化身。此義後広論之。

『合部金光明經』卷第一「三身分別品」（大正藏一六・三六三下）

何者心身非化身。是地前身。

S 『法華統略』卷下本（卍統藏經四三・七二左下）

問曰。何故前明多宝、後辨分身。

答曰。有一次第。一事次第、二義次第。事次第者、前有多宝出、次令集分身、後明釈迦開塔。一義次第者、多宝是法身相故前明。由法身有心身。由心有化。如金光明云、化身依心身、心身依法身。法身無所依。淨名亦云、依無住本、立一切法。無所依也。三土亦次第。要由

住非淨穢土、故能示応身淨土。由心身淨土、故乘化身。故有穢土。故文中前明多宝土也。

『合部金光明經』卷第一、「三身分別品」(大正藏一六・三六三下)

善男子。是第一身。依於心身。是故得顯。是諸心身依於法身。故得顯現。是法身者是真實有。無依処故。

T 『法華統略』卷下末(卍統藏經四三・八〇左上)

壽量品

玄義、今疏具足。此品明三種如來三種壽量、故云壽量品。今依金光明經、略以十五門、釈三身義。初列次第門。謂化心法。与此經及法華論同也。是從末至本、以為次第。從本至末、其義易知。

『合部金光明經』卷第一、「三身分別品」(大正藏一六・三六二下 三六五中) 參照。

U 『法華統略』卷下末(卍統藏經四三・八一右上)

十四二無所有門。經云、法身一無所有。謂相及相処二無所有。即撰論云、相識見識。見識是識。相是前塵。見是能識、法身無此二也。

『合部金光明經』卷第一、「三身分別品」(大正藏一六・三六三下)

善男子。是法身者一無所有顯現故。何者名為二無所有。於此法身相及相処。二皆是無。非有非無。非一非二。非數非非數。非明非闇。

V 『法華統略』卷下末(卍統藏經四三・八六左下 八七右上)

問。若誦經時、即生四智、破五住、度五百由旬、与仏何異。又地前菩薩何未得法性身耶。

答。菩薩已破其麤。未破其細。故与仏不同也。仏悟因縁六本來無六。前悟無六宛然六、窮四智辺、竟五住惑傾、得三身之用、悟六本來無六。故得法身。無六、為衆生故現六。有心化両身。無六、而有妙六、故有大小相好、於淨土成仏。即是心身。故金光明説心身、亦有相好。

吉蔵撰『金光明經疏』の真偽問題（奥野）

也。無六身同衆生相好。於穢土中爲化仏。然六無六、既窮実相辺竟。無六而六尽因縁之原。故眼徹見十方。故与菩薩異也。

『合部金光明經』卷第一、「三身分別品」（大正蔵一六・三六三上）
是身得現具足三十二相八十種好頂背円光。是名応身。

W 『法華統略』卷下末（菅野『統略（下）』八三二—八三三頁）

約縁悟如何。妨此仏彼仏。同悟、即是如。如既無異、悟云何異。

答、正当云不異而異異而不異。然実不可論其異不異。故経云、仏不能行、仏不能到。豈可定分其一異。随縁、一異義無失也。二者依金光
明积多宝与釈迦、此欲明三涅槃義。経云、応化二身、非是実有人。念念滅、名爲有余。有余者、非究竟法也。法身究竟、名爲無余也。多
宝表法身、明無余涅槃。釈迦名化迹、故是有余。

『合部金光明經』卷第一、「三身分別品」（大正蔵一六・三六三上）

前一種身是仮名有。是第三身名爲真有。

【付記】

右に示した吉蔵の引用例を見ると、その引用が、「三身分別品」中心であったことが改めて理解される。また、『法華統略』以前に成った法華疏では、「新金光明経」「七卷金光明経」「七卷金光明」と呼称しているのに対し、『統略』ではそうした呼称を一切用いていない点が注意される。したがって、「七卷」「七卷経」の呼称を用いる『金光明経疏』は、『法華統略』以前の撰述かとの印象も抱くが、これはあくまで印象に過ぎない。また、これは三桐慈海氏も注意されていたところであるが、吉蔵の『金光明経』依用がその当初から真諦訳であったとすると、吉蔵はなぜに真諦訳に注せず、曇無讖訳に注したのかも解明されなければならない問題であると思われる。論じ残した課題は多い。すべては次稿を期したい。